

22【街の散策からの気づき発見】

春日部八幡神社 小正月の風物詩「どんと焼き」

会員 K.T.

1月15日(水)春日部八幡神社の「どんと焼き」にいった。新年から続いた正月行事の締めくくりが、小正月の火祭りともいわれる「どんと焼き」で、「どんどん焼き」・「どんど焼き」とも言われ、正月にお迎えした歳神様を見送る神事である。

お正月に家々に迎え、まつる歳神(としかみ)さまは歳徳神(としとくじん)・お正月さま(としこしさま)等とも呼ばれる。「とし」は稲の稔りを意味する穀物神である。古代の日本は農耕が発達するにつれ、年の始めにその年の豊作が祈念されるようになり、それが歳神さまを祀る行事となって、正月の中心行事となった。現在でも残る正月の飾り物は、もともと歳神様をお迎えするためのものであり、門松は歳神様が来訪するための依代(よりしろ)、鏡餅は歳神様へのお供え物である。歳神様をはずす日は、門松等正月飾をはずす日で地方によって変わるところもあるが、概ね15日が多い。

15日は小正月といわれ、正月飾りや御札・お守り等の縁起物をかたずけるため、「どんと焼き」が行われ、「どんと焼き」の煙で歳神様を見送り、1年の健康や平和を願って正月行事を終える年中行事の神事になる。

年中行事とは個々の家庭や村落共同体などの集団において、毎年同じ時期に繰り返し行われる伝承行事をいう。行事はその年の農作物の豊穡を祈願するものであった。年中行事の日は陰暦で定められ、農作業や季節と深くかかわっていた。

明治5年(1872)の「改暦の布告」により、それ以前の大陰暦(旧暦)を廃止し、太陽暦(新暦)になった。このため、年中行事の暦日は、旧暦・新暦と行事を1ヶ月遅れで行う「月遅れ」で行われるようになった。第二次大戦後(1945)以降は、新暦で行われることが多い。「どんと焼き」では正月飾りや一年間ご加護いただいた御札や御守りに感謝を捧げて境内で焼納する。正月飾りや御札の返納で来た人々は「返納受付所」で渡し、「どんと焼き」係の氏子の人達が専任で火に投入している。ときおり、「ビニールのは焼却できませんので、お持ち帰りください。」との声が聞こえる。時代にあわせ、変化や制約もあるようだ。小正月の起源を調べると、諸説あるも、古代の日本では、立春を過ぎたころの満月の日を1年の始まりとして祝う風習があったとされている。7世紀頃に、大陸から太陰暦(旧暦)が入ってきたことで、1年の始まりを祝う正月は1月1日に変化した。旧暦では月の満ち欠けを基準に新月を1日・満月を15日と数える。旧暦の採用で正月は1月1日に祝うように変化したものの、立春を過ぎたころの満月を祝う風習は暦が変わっても続き、1月15日の満月の日にも正月を祝ったことが『小正月』の起源といわれる。

余談ながら、「松の内」は正月から小正月までの期間をいう。明治時代にグレゴリオ暦(新暦)が導入された以降も、月の満ち欠けや立春とは無関係に1月1日の正月と1月15日の小正月を祝う風習は残った。

松とりて世ごろ楽し小正月 (凡董)

人々の生活様式の急激な変化、市町村の合併等、時代の変化とともに暮らしの中の年中行事は次第に薄れてきている。しかしながら、地域の年中行事は伝統文化として、これからも続くだろう。神前の前には次の行事、二月二日「節分祭」とあった。「節分」は二十四節気の「立春」の前日の神事で、「立春」は旧暦では春になる。新しい季節を迎えるための行事に豆まきを行うのは、豆は「魔滅(まめ)」に通じることから一年の無病息災を祈る意味があるらしい。時間は日々刻々と流れている。

